# 初級日語語法課程之翻轉教學的改進與成效驗證

# 李美麗 大葉大學應用日語學系副教授

# 摘要

本研究是針對於 2019 年在「初級日語語法」課程中所進行之翻轉教學的過程中發現的問題進行改進。問題包含「教師無法真實掌握學生是否真的觀看線上課程」、「課堂上無法有效地進行課堂互動」、「學生敷衍做課前的確認問題」、「學生上課不發言」等。

因此,本次教學實踐研究,除了持續進行翻轉教學外,並結合「學思達」之教學策略,希望透過課中各種活動設計,除強化課前預習的成效,並希望透過同儕間的對話,鼓勵學生多方思考並勇於將文法「說」出來。

實踐結果顯示,將預習確認問題轉化為小考可以提高學生的預習率。而且,在課堂中設計的各種活動,通過結合使用學思達和將發言轉化為積分的策略,可以提高學生的發言意願,並增強小組間的溝通能力。但是,到了後期課程,學生逐漸出現了「學習倦怠」現象,同時,在觀看視頻時學習者所產生的問題無法立即解決等,這都是實施翻轉教學中還存在的問題。

關鍵詞:翻轉教學、學思達、初級日語語法、學習倦怠

受理日期: 2024年02月20日

通過日期: 2024年 05月 24日

DOI: 10.29758/TWRYJYSB.202406 (42).0007

# Improvements and Verification of Effectiveness in Flipped Classroom Teaching in Elementary Japanese Grammar Course

Li, Mei-Li

Associate Professor, Department of Applied Japanese,
DA-YEH University

#### Abstract

This study focuses on improvements made to issues identified during the flipped classroom process in the "Elementary Japanese Grammar" course in 2019. The problems include "teachers not being able to truly grasp whether students actually watch the online courses," "ineffective classroom interaction," "students superficially addressing pre-class confirmation questions," and "students not participating in class discussions."

Therefore, this study, in addition to continuing the flipped classroom teaching, integrates the "Learn-Think-Achieve" teaching strategy. It aims to enhance the effectiveness of pre-class preparation through various inclass activity designs and to encourage students to engage in peer-to-peer dialogue, promoting multifaceted thinking and the courage to actively articulate grammar concepts •

The practice results show that transforming pre-study confirmation questions into quizzes can improve students' pre-study rates. Moreover, the various educational activities designed in the classroom, by combining the use of the Learn-Think-Achieve method and converting speaking into points strategy, can enhance students' willingness to speak and improve inter-group communication skills. However, as the course progressed to its later stages, students gradually showed signs of "learning fatigue," and the problems encountered by learners while watching videos could not be immediately resolved, which remain as issues in the implementation of flipped classroom teaching.

Keywords: Flipped Classroom, Sharestart, Elementary Japanese Grammar, Learning Fatigue

# 初級日本語文法における反転授業の改善と効果検証

# 李美麗 大葉大学応用日本語学科准教授

# 要旨

本稿は、2019年の「初級日本語文法」の授業で行われた反転授業で発見された問題の改善を目的とするものである。教学現場で発見された問題には、「教師は生徒が果たして授業前に視聴ビデオを見ているかどうかを把握できない」、「授業内での効果的な対話や問題解決の誘導が難しい」、「事前学習の確認問題をおざなりにする」、「授業中に学生があまり発言しない」ことなどが含まれる。

したがって、本研究は、反転授業を行うに加えて、「学思達」アプローチを組み合わせることにより、様々な授業活動を通じて、授業前の予習の効果を強化するだけでなく、生徒同士の対話を活用し、多角的な思考で文法を「話す」勇気を促すことを目指している。

実践の結果、事前学習の確認問題を小テストにするのは学生の事前予習率を向上させることができる。そして、授業中で設計された様々な教育活動は、学思達を通して、また、発表をポイント化にするという策を組み合わせることによって、学生の発言意欲を高め、グループ間のコミュニケーション能力を強化できることが確かめられた。だが、後期の授業になると、学生は徐々に「学習倦怠」の現象が現れてきて、また、ビデオを見ているときの学習者の質問解決など、反転授業を実施している際にまださまざまな問題が残っている。

キーワード:反転授業、学思達アプローチ、初級日語語法、学習倦怠

# 初級日本語文法における反転授業の改善と効果検証

## 李美麗

# 大葉大学応用日本語学科准教授

#### 1. はじめに

筆者は、2019年に初級日本語文法の授業で受動的な授業を能動的な授業に転換させるため、反転授業を採用した。反転授業はアウトプット主体の授業で、従来のインプット主体の授業とは性質が異なり、わからないことがあれば対面授業で教師と話し合えるほか、生徒同士で協働する機会も増える。

授業実践の結果、教師が生徒の理解度を把握しやすいこと、生徒 自身が理解できるまで、繰り返し学習できること、生徒の学習効率 が向上することなど、生徒の学習効果が前と比べれば、高まったこ とがわかった。

その一方、授業実践中の学習者の学習状況の観察、授業実践後の学習者のフィードバックを通じて、教師と学生が直面しているさまざまな問題にも気付いている。まず、教師側の問題としては、「教師は生徒がオンラインの講義を本当に見ているかどうかを把握できない」こと、「授業内での効果的な対話や問題解決の誘導が難しい」こと、「学生はやはり教師主導の授業を好む」ことなどが含まれる。それに対し、学生側では「事前学習の確認問題をおざなりにする」こと、「事前学習の内容を対面授業まで記憶できない」こと、「授業中、学生があまり発言しない」ことなどが取り上げられる。

これらの問題のうち、特に「事前学習の内容を対面授業まで記憶できない」、「授業中、学生があまり発言しない」といった二つのことが、反転授業の実施効果に大きく影響を与えていると思う。反転授業が、世界的な注目を集めているのは主にオンラインを使用した事前学習を行い、その後に対面授業で講義や意見交換を行う学習で、学生・先生双方の効率アップのほか、生徒の理解力や学習意欲、問

題解決能力の向上も見込めるからである。ところが、「事前学習の内容を授業まで記憶できない」ことと、「授業中、学生があまり発言しない」ことは、授業中の教育活動をうまく進められるか否かにかかっている。

筆者は反転授業を実施する目的は単に生徒が事前に学習することだけに留まるのではなく、もっと重要なのは、学生が事前に学習したものを、授業中にクラスメートや教師との対話、質問、発表などの活動を通じて、自分の考えを表現し、文法的な論理概念を構築するのである。

したがって、本稿では2019年に実践した初級日本語文法の反転授業から得た示唆をもとに授業を改善し、反転授業を土台にしつつも、「学思達」アプローチを組みあわせ、授業活動において多様な方法を試み、授業改善の可能性を探りたい。

#### 2. 先行研究

#### 2.1 反転授業

反転授業は、従来の授業形態をまさに「反転」させたもので、いわゆる「授業」を映像教材・動画を用いて予習の形で家で受講し、学校の教室で行う授業の時間では通常「宿題」として扱われる演習や、学習内容に関わる意見交換などを行うものである。つまり、学びのインプットとアウトプットの場を全く逆にするのである。

そして、FLN (flipped learning network ) は反転授業は F (柔軟な環境 flexible environment)、L (学習文化 learning culture)、I (意図的な内容 intentional content)、P(専門的な教育者 professional educator)という4つの要素に基づいて構築される必要があると提唱している (FLN, 2014)。

その中で、「学習文化」とは、教師主導の教育モデルから学生主体の授業学習への移行を指し、学生は自分自身の学習ペースを把握し、より深い学習と仲間との討論の機会を持ち、意義のある学習を展開することができるのである。一方で、「意図的な内容」とは、教師が

どのような教学ストラテジーや教育活動を必要とするかを常に考え、 授業の活動を生徒の反応に基づいて繰り返して検討及び修正によっ て、学習効果を最大化にし、生徒が知識を獲得する手助けとなるこ とを意味する。

反転授業の教学ストラテジーに関して、筆者は先行研究を以下の ようにまとめた。

1.オンライン試験や加点することを通じて生徒の事前予習を促すこと:

Herreid&Schiller (2013) は、生徒に YouTube の動画を事前に視聴させ、そして、事前予習内容について質問した。一方、Frydenberg (2012) は、ボーナスポイントを使って生徒が動画を視聴する意欲を高める方法を提案した。

- 2.グループディスカッションを通じて知識を構築・運用すること: グループコラボレーション学習は、反転授業で効果的な学習方法 とされている(Westermann、2014)。また、Wallace、Walker、Braseby、 Sweet (2014) は、教師が授業中の時間をほとんど学生のディスカッ ションに使い、事前学習の内容を深めるように導くことが重要であると述べている。
- 3.オンラインプラットフォームの様々なツールを活用する:

Hunt (2013) の研究によれば、反転授業とゲームを組み合わせることで、学習意欲を高める助けになるとされている。また、Westermann (2014) は、生徒が動画を視聴した後、オンラインディスカッションボードで議論を行い、批判的な感想を書くことによって学生から高い評価を受けたと報告している。

#### 2.2 学思達アプローチ

学生に批判的思考力を身につけさせることは、常に重視されてきた教育の目標である。学思達とは、2013年に張誠輝によって提唱されており、教授の流れは 1. 学生の自習、2. 問題について考える、3. グループ内で討論、4. プレゼンテーション、5. 教師による補足とされる。主に学生を中心に据え、各授業で学生が自己の学習、読

解、思考、議論、分析、総括、表現など、多様な能力を総合的に養成するのを目指すアプローチなのである。この教育法の目的は、学生の自主学習を促進し、学習内容に関する問題を発見し、解決策を見つけるために情報を検索・分析し、個人の理解を他人と共有することによって、人とのコミュニケーションをすることである。

そして、学思達を活用するには、教師は問答形式の教材を作成し、 問答問題やさまざまな活動設計を生かして、授業間で教師と生徒、 または仲間との対話を生み出す必要がある。これにより、生徒はこ れらの教室活動の訓練を通じて、自己学習、思考、表現の能力を無 意識のうちに磨くことができ、記憶や理解の能力から判断、応用、 創造などの総合的な能力を育むことに至るのである。

学思達アプローチを生かす教学実践としては、陳卲屏(2019)は 学思達を国語の授業に取り入れた結果、学生が授業の進め方に対す る好意度を高めることができ、特に異質な討論が学習に非常に役立 ち、より多くのポジティブな交流を生み出し、学生からの肯定的な 評価を得ている。また、黄啓原(2018)は高校の会計コースに学思 達アプローチを取り入れた結果、学生は自己主導型学習の効率、独 立性、創造性、問題解決能力などの面で、正の効果があることが分 かった。

つまり、学思達アプローチは学生の学習への興味と参加度を効果的に高めることができ、特に議論やコミュニケーションの面で顕著である。また、問題解決のスキル、批判的思考の育成にも役立っていることが分かった。

Chickering & Ehrmann (1996) は、「学習は傍観の行為ではない。… 学生は学んだことを口に出し、反省し、そして、過去の経験と結びつけ、日常生活に応用しなければならない。彼らは学んだ知識を自分自身の一部として統合しなければならない」と指摘している。周知のとおり、これまでの初級日本語文法の教授では主に文法の説明をして言語知識の授与に重点を置いているから、学生が教えられた文法概念をどこまで理解したか教師は把握しかねる。例えば、図 1 に示すように、異なった学生は同じ質問に対して同じ答えを書いた のに、その答えを選択した理由を求めたら、その説明する言葉遣い から、学生がその文法項目を果たして理解したか否かすぐわかる。

したがって、本研究では、前述の反転授業実践の問題点を改善し、 また初級から学生が学んだ文法を簡潔に表現し、記述できるように、 反転授業をベースにし、学思達アプローチを組み合わせて、その学 習効果を探求しようとしている。

1. 目の中に{ a ごみを入れた b ごみが入った }ようです。痛い、痛い。。 1. 目の中に{ a ごみを入れた b ごみが入った }ようです。痛い、痛い。』 自動詞 非人為施加變化,垃圾飛入眼中為自然變化。』 灰塵是自己跑進眼睛裡的。』 2. A: あ、熱があるんですか。少し顔が赤いですよ。。 2. A:あ、熱があるんですか。少し顔が赤いですよ。。 B: ええ、38 度あります。ずっと{ a下げないんです b下がらないんです }。』 B:ええ、38度あります。ずっと{a下げないんです b下がらないんです }。』 自動詞 非人為施加變化,發燒為自然變化。』 蹒跚长少人工上临时,从心理人和四/回应日人工一致\ 3. A:わたしは先月から油絵を習っているんですよ。。 3. A:わたしは先月から油絵を習っているんですよ。↓ B: いいですね。わたしも何か{ a始めようと b始まろうと }思っています。 B:いいですね。わたしも何か{ a始めようと b始まろうと }思っています。↓ 自動詞 非人為施加變化,自行決定的變化。。 4. ごみは火曜日と金曜日の朝、{ a出して b出て }ください。↓ 動作者是我、♥ようと思っています有我自己的意志、所以選他動詞。』 他動詞 人為施加變化,由某人拿出垃圾所產生變化。 4. ごみは火曜日と金曜日の朝、{ a 出して b 出て } ください。 4 5. あした美容院に行って、{ a髪の毛を切ります b髪の毛が切れます }。』 垃圾不會自己倒(移動),需要有人拿出來倒垃圾。 他動詞 人為施加變化,某人剪了頭髮使頭髮變短。。 5. あした美容院に行って、{ a髪の毛を切ります b髪の毛が切れます }。』 6. ちょっとうるさいですから、テレビは{ a消しましょう b消えましょう }。』 切ります是人把頭髮剪掉,切れます是頭髮自己掉。』 他動詞 人為施加變化,某人使電視關了。 6. ちょっとうるさいですから、テレビは{ a 消しましょう b 消えましょう }。』 7. 公園の電気は、暗くなると自動的に{ aつけます bつきます }。。 消す是他動詞,覺得吵人把它關掉。 自動詞 非人為施加變化,機械運作的自然現象。。

図1 学生の宿題

#### 3. 授業実践の概要

#### 3.1 授業の概要

本授業は週2コマ(1コマ50分)の一年生の必修科目「初級日本語文法(一)(二)」の一年間のコースである。受講生は本学科の一年生で、ほとんどゼロから日本語の学習を始める。そして、一回目の授業ではこのコースの学習目標を説明し、授業形態は第一学期の中間テスト(九週目)を境にして、前半は教師主導の一斉授業で、後半から第二学期まで全部反転授業に学思達アプローチを行うこと

を学習者に理解してもらう。そして、前述のように、学思達アプローチを生かすからには教材は市販される文法教科書でなく、筆者の手作りの問答形式の教材を使用した。

#### 3.2 授業の設計

#### 3.2.1 事前準備

教師の事前準備では、問答式の教材の作成、教材に基づく PPT の作成、ビデオの録画、および授業活動の設計が含まれている。そして、事前学習の確認テスト、深い学びの問題の作成や授業内のインタラクティブな Kahoot ゲームの問題を作ることも授業のまえに準備しておかなくてはならない。

# 3.2.2 授業実施

授業実施の段階に関しては前述のように、第一学期の中間テストまで一斉授業の形をとる。教師の役割は教え込みではなく、問答方式を採用し、適切な刺激を与え、学習者に能動的に文法の意味や構造を発見させるような発見型の教授法である。

そして、第一学期の中間テスト後から反転授業の授業形態に入る。 この段階は反転授業を基盤に、学思達アプローチと組み合わせなが ら進んでいく。次は反転授業を実施する流れを説明する。

# (1) 事前学習

授業の約1週間前に次の授業回のテーマに関する事前動画をLMS で配信し、事前課題は ZUVIO を使う。学生は事前動画を視聴してから、事前課題に取り組んだ。事前動画を視聴する時間と事前課題の締め切りは次の授業の一日前に設定し、課題の提出を必須とした。事前課題には「動画内容のまとめ」、「動画内容のわからないところ」及び「確認テスト」の三つの部分がある。

一部の学者は、予習率を向上させるために、生徒がビデオ講義を見てから、ワークシートを完成させたり、予習内容に関する理解度の確認問題を書かせたりする必要があると提案している(小松 2014、藤田・芳賀 2017)。ところが、前回の反転授業の事前学習では予習内容に関する確認問題を用意したが、「宿題をサボったり、いい加減

に宿題をしたりする学習者はしばしば見られた」(李美麗 p 163)とされる。したがって、今度は、「教師は生徒がオンラインの講義を本当に見ているかどうかを把握できない」、「事前学習の確認問題をおざなりにする」といった前回の反転授業実施後の問題点を解決するため、事前課題を小テストとして扱う。小テストの問題図 2 のように、ZUVIO を使い、制限時間までに学生が完成しなくてはならない。



図 2 予習内容後のオンラインの確認問題

#### (2) 対面授業

対面授業においては、また「基本学習」と「深い学び」の二段階に分けて進んでいく。前の反転授業の実施経験では「解説ビデオも見て、ノートもちゃんと取ったが、実際の対面授業となると、見た文法内容はほとんど忘れてしまったから、対面授業の教室活動にうまく取り組むことができない」(李美麗, p160)という学生のファイバックがあったから、基本学習では、学生に記憶を喚起させるため、まずグループごとに今度の学習内容を発表してもらったり、短

文を作ってもらったりする。そして、教師は生徒の確認テストに異なる答えを整理し、グループに配った。グループのメンバーがお互いにディスカッションをしたり、誤りを修正したりしてから、全員の討論に入る。全体ディスカッションではグループごとにどこで何が間違っているかを発表してもらう。

基本学習のあと、深い学びの学習に入る。筆者は、文法テーマに応じて異なる授業活動を設計している。授業活動には、「事前学習の質問を答えよう」、「文法の間違いを見つけよう」(図 3)、「kahoot ゲーム」、「文章を書いてみる」などが含まれる。特に「文章を書いてみる」という授業活動は月ごとに、自己紹介、私の家族私の学校など学生の周りに関する話題について学生自身の学んだ文法知識を生かし、徐々にそのトピックの内容を拡大し、深化させる。活動が終了した後、次回の授業時間に発表してもらう(図 4)。

また、発表の時に、問題が難しいとか、よく理解できていないことなどが原因で答えられない場合は教師が補足することになる。これらの活動の重要なポイントは、文法学習を深化させるだけでなく、さまざまな活動を通じて自分の意見や考えを表現することができるようになることである。授業の最後では、教師は今日の授業内容について足りないところを補足する。

# 「た」形作業~大家來找碴~ • 1.高校のとき、勉強したり、勉強しないたりします。 • → • 2.お金があったら、外でご飯を食べません。 • → • 3.高校の時、よく塾へ行ったり、アルバイトをしたりました • →

図3文法の間違いを見つけよう

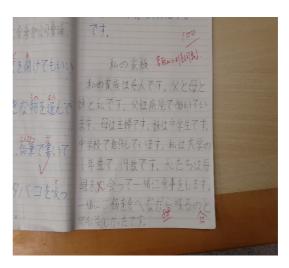


図4 文章を書いてみる

対面授業の教授ポイントは学生が自分の考えを表現することにある。授業の原理は対話であり、教師の発言だけでは授業の活性化は難しく、教師の発話と学生の質問という教師と学生との対称的なコミュニケーションが存在することが望ましいといわれる(歓喜・木下,1995)。したがって、授業を活性化するには、筆者が学思達アプローチを導入する。つまり、事前学習で得た文法知識を自分の言葉で考え、「誰に、何を伝えたいのか」「どのように伝えるのか」などのアウトプットスキルを育てたい。

ところが、大学での講義形式の授業は、従来教師が一度に多くの学生に向かって教授する「一方向型」の授業が主である。「一方向型」の授業においては、学生は沈黙し、質問しないことを当然としており、教師と学生との対称的なコミュニケーションは存在していない(歓喜・木下,1995)。したがって、ただ新しい教学アプローチを導入するだけでは、学生の発言意欲を高めることはできると言いきれない。学生の自発的な発表行動を促すため、筆者は授業での発表をポイント化するという策を取った。また、学生が積極的に発言できるように、答えを間違ってもポイントカードをあげる。つまり、正解にまでたどり着かないで、とにかく積極的に自分の考えを表現する姿勢が大事だという教室の雰囲気を作りたい。

これらの授業活動のほか、学生の問題解決能力、対人能力(コミュニケーション能力)、発想力を養うために、第二学期に文法ビデオの作成という課題も授業活動に取り入れられた。正直に言うと、今まで、1年間で基礎的な文法項目を全て教え切ることは至難の業である。このため、今回の教育実践では、まだ完了していない文法項目をグループの課題として、レポート作成と文法ビデオの制作をさせ、評価方法は、自己評価と相互評価(図5、6)を含む。



図 5 相互評価の問題

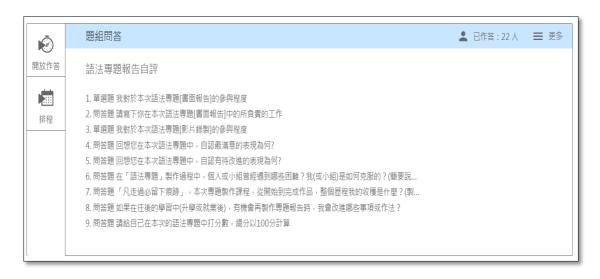


図 6 自己評価の問題

# 4. 学習成果の検討

筆者は第1学期終了および第2学期終了の時、それぞれ学習アンケート調査を行い、学生の学習効果を探求したい。アンケートをとる人数は前期は22人で、後期は25人だが、アンケート結果は、前期と後期ですべてこの授業を受講した18名の学生を対象とする。アンケートの質問文には大きく分けて自由回答形式と選択回答形式の2つがある。

#### 4.1 選択回答形式の結果

#### 1. 学習効果について

まず、動画視聴後、「視聴後の動画内容を要約し、授業で発表することで、文法の記憶保持に役立てるか」について、図7のように、両学期ともおおよそ15人(83%)の学生が同意しているが、後期は「非常に同意する人」は1人から5人に上がったことから見れば、後期は前期よりも、学生が視聴後のまとめ、授業中で発表することは、脳に入力した文法知識をもう一度振り返り、また記憶として定着させることができるのがわかった。

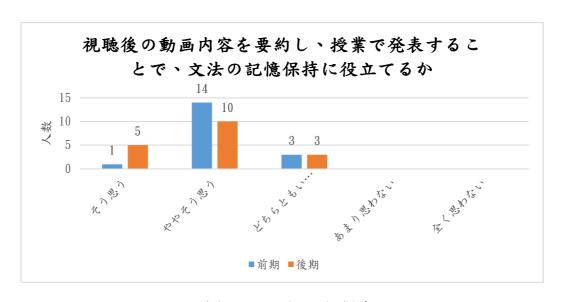


図 7 アンケート調査 1

反転授業では予習をさせ、事前にインプットさせているとはいえ、動画内容を確実に定着できるかどうかは把握しにくいので、動画を見た後、確認問題を書かせるのは反転授業実施の通常の流れである。ところが、前回の実施では「事前学習の確認問題をおざなりにする」学生がしばしば見られた。それは前回の反転授業の実施ではただ事前に講義ビデオを見て、確認問題を書くことを義務化させるだけに留まっており、中途半端な気持ちで確認問題を書く学生はあるからであろう。したがって、今度は確認問題を小テストとして要求する。

このような策を取ってから、果たして学生は積極的に確認問題

に取り組んでいるかについて、「動画視聴後の確認問題をテスト化することで、自分の視聴の意欲を高められるか」(図 8) という質問に、83%の学生が同意する。動画視聴後の確認問題のテスト化は学生の視聴の意欲を促す動機付けの要因の一つであることが分かった。つまり、確認問題がテスト化により、学生はいい成績をとるため、まだ定着できていない部分に関しては、もう一度授業動画を視聴して理解を深めることができる。

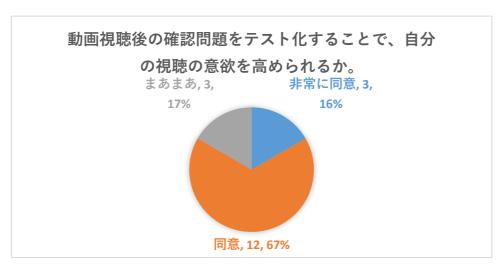


図8アンケート調査2

そして、教師のコースデザイン(反転授業、学思達、文法ビデオ制作など)を通じて、学生の思考力や、表現力を向上させることができるかについて、78%の学生が、これらのアプローチを実施することで、授業中に仲間とのインターアクションの機会が増えるから、自分自身の思考力、コミュニケーション能力が過去よりも向上したと感じている。また、授業中では「よく理解できる学生が理解できていない学生を指導する」という教室風景も何度も見られたから、グループ学習では、互いに教え合うことによって、教わる側だけではなく、教える側にとってもいい勉強になっていると思う。

#### 2. 自律学習の習慣について

そして、反転授業と学思達の組み合わせにより、学生の自律学習

能力が向上したかどうかについて、まず、筆者は反転授業の実施前後の学習習慣(図 9)について調査した。反転授業の導入前、学生の学習習慣は、多くが「たまに」、「試験前」で、「全然勉強しない」と回答した学生も2名いた。しかし、反転授業を導入した後、定期的に勉強する学生が増え、全く勉強しない学生はいなくなったことが判明した。

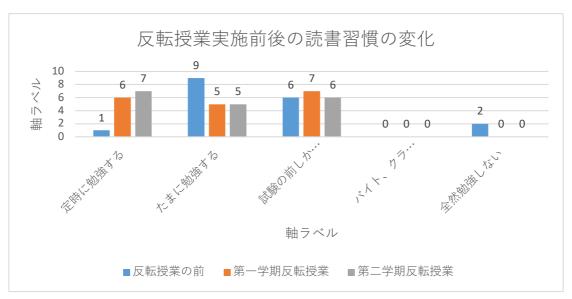


図9アンケート調査3

さらに 18 人の学生(図 10) の個別の変化を詳しく分析すると、10 人の学生が進歩、7 人の学生が元の状態を維持、1 人の学生が後退した (その学生は日本語に興味がなく、2 年生で他の学科に転換する予定)。したがって、全体的に見れば、反転授業は学生の自律学習習慣を向上させるのに役立つと言える。

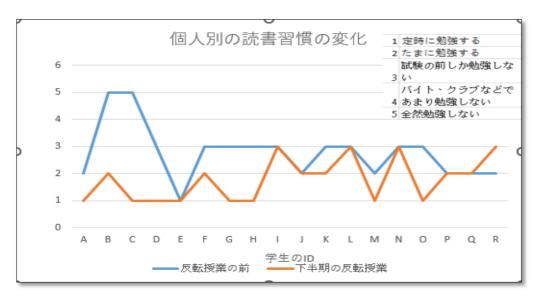


図 9 アンケート調査 4

そして、前述のように、学習者の自発の発言を促すように、正解か否かにかかわらず、とにかく手を挙げて発言すれば、ポイントカードをあげる。果たして、このような策により、学生が自発的に発表するかについて、85%の学生はポイントカードを取りたいから、自発的に手を挙げて教師の質問に答えることとなった。挙手という動きは、授業に対する意欲の表れであると同時に、授業内容の理解度の表れでもある。また、本来あまり発言しない学生は周囲の勢いに乗せられて手を挙げていることも観察される。

ちなみに、授業中で発言したくない原因(この問題は多肢選択題である)について調査してみたら、筆者が考えていた「事前に予習しないから言えない」というのではなく、「事前に予習はしたが、自分の性格のせいで発言するのが恥ずかしい」、「他人の前に発言する習慣がない」、「知っていても言わない」などが取り上げられた。

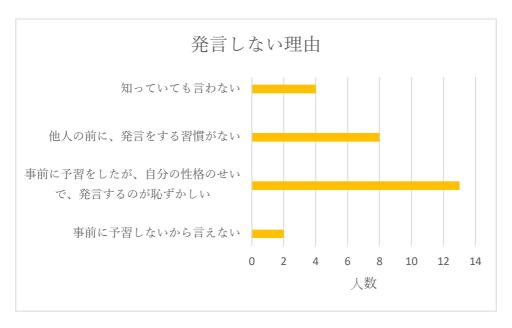


図 10 アンケート調査 5

そして、このような反転授業の授業形式の訓練でこれから自分で 自学する能力を持っているかどうかについて 80%の学生は肯定な 考えを示している。

## 4.2 自由回答形式の結果

#### 1. 反転授業に関して

筆者は、授業の前期及び後期に、反転授業のメリットとデメリットについて調査し、学習者からのフィードバックを KH Coder で質的分析を行った。まず、反転授業のメリットについて、前期の語彙数は 277 字で、後期のは 455 字である。それぞれの形態素分析は図11、図 12 のようである。

この 2 回の学生の感想から、反転授業がもたらす学習の利点を「事前学習」、「繰り返し視聴」、および「自律学習」の 3 つにまとめられた (図 13, 14)。

反転授業の実施では学生が授業に向けた内容をしっかりと理解した上で授業に臨み、また分からないところは何度でも再生ができるため、視聴を繰り返し理解を深めることができる。さらに復習にも活用することができるため、知識を定着させる効率が格段にアップする。このような、自分の学習ペースに合わせ、自由に調整できる

ので、学習者の内発の学習動機も誘発させることができる。



図 11 前期の反転授業のメリットに関する形態素分析



図 12 後期の反転授業のメリットに関する形態素分析

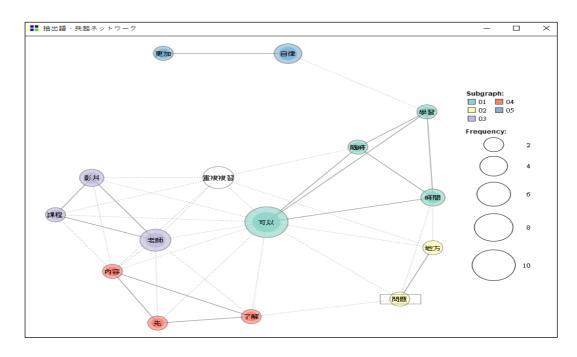


図 13 反転授業に関するメリットの共起ネットワーク分析(前期)

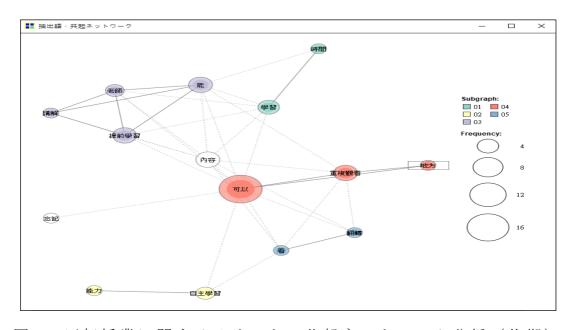


図 14 反転授業に関するメリットの共起ネットワーク分析(後期)

反転授業のデメリットに関しては、前期の語彙数は 176 字で、後期のは 235 字である。それぞれの形態素分析は図 15、16 のようである。



図 15 前期の反転授業のデメリットに関する形態素分析



図 16 後期の反転授業のデメリットに関する形態素分析

前期では中間テスト後から反転授業が導入されたから、生徒にとっては授業後にわざわざ時間を割いて、ビデオを見ることが適応しづらいことがわかった。ところが、後期では、学生たちが徐々に反転授業の学習形式に適応し、授業後の自主学習が自然なものとなっ

てきている。

そして、学生がビデオを見ている際、質問が生じても即座には解決できないということは前期と後期で生じた同じ問題である。筆者が事前学習のコースデザインでは「ビデオ内容に関する質問」をZUVIOに書いてもらうが、実際に自分の質問を書いてくれる学生はほんのわずかしかいない。このような事前学習で生じた問題点は対面授業で表出すればまだしも、表出しないと学習の障害となるおそれがあるので、教師としては注意しなくてはならない。

また、学習者の反応から反転授業が常態のこととなると、学生は「ビデオを見ながら寝てしまった」という学習倦怠の状態が現れてきたのが観察された。つまり、自宅で学習する習慣ができている学生にとっては、反転授業は学校での授業はより興味深いものとなり、学習成果も上がりやすくなり好循環に突入できるが、その反面、学習意欲の乏しい生徒にとっては、自発的に自宅で学習することはもと容易なことではないから、前期において、はじめて反転授業に出会うから、まだ興味津々で事前学習の動画を見るが、後期になると、だんだん自宅学習を嫌がって予習をやらなかったり、ビデオを見ながら寝てしまったりする現象が出てくる可能性が大きいると、だんだん自宅学習を嫌がって予習をやらなかったり、ビデオを見ながら寝てしまったりする現象が出てくる可能性が大きいのような学習倦怠の状況をいかに改善するかについて深く考えなくてはならない。

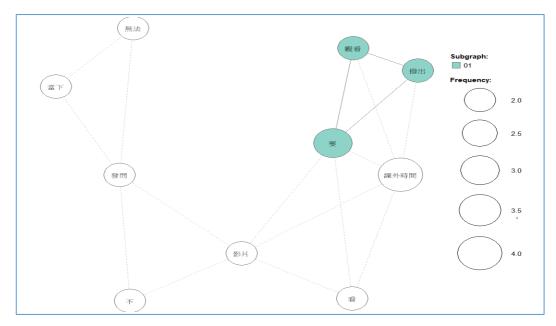


図 16 反転授業に関するデメリットの共起ネットワーク分析(前期)

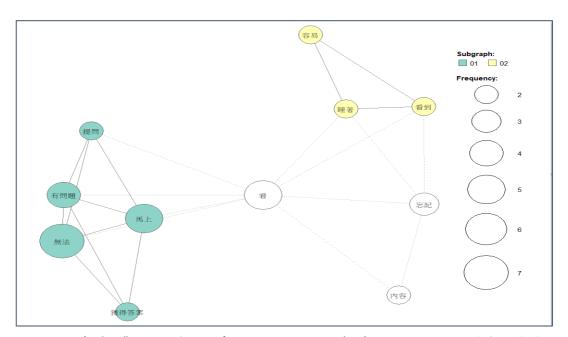


図 17 反転授業に関するデメリットの共起ネットワーク分析(後期)

# 2.文法ビデオ作成に関して

上記の反転授業の感想に加えて、著者は文法ビデオの作成の学習 過程において、学生がどのような成果を得たのかに関しても調査を 行い、四つのポイントにまとめられた。

# (1)コミュニケーション協調能力の向上

学生のコメント:私の収穫は他の人と一緒に議論することで、時に

は自分で答えを見つけるほうが早いこともあるが、他の人と議論している時にはより効率的であり、議論は非常に重要な事項であると思っている。

(2)ビデオ、PPT 制作技術の向上

学生のコメント:私は PPT の制作技術を学んだ。例えば、ビデオの編集方法、プレゼンテーションのスキル、Word 文書制作など...。

# (3)資料検索能力向上

学生のコメント: 資料を検索したり整理したりする能力が向上した。 インターネットで多くの情報を得ることができるが、どの情報が正 しいかわからないため、小グループ内で討議を行う。

(4)チームワークの重要性を理解すること

例:私はチームワークが非常に重要だと感じている。個人がそれぞれ積極的に貢献すれば、効果も倍増する。

学生の感想から見ると、文法ビデオの制作を通して、ただ新しい 文法の学習だけでなく、学生たちが習得・活用・探究という学びの 過程の中でお互いに協力しながら知識を相互に関連付けてより深く 理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして 解決策を考えたりすることに向かう「深い学び」が実現できている のである。

#### 4.3 視聴回数と成績との関係

学生の成績と事前の視聴回数は正の相関関係にあるか?筆者は学生の前期と後期の成績と学生の視聴回数の間で相関係数の分析を行った。調査結果から、前期の4回のフリップ学習では相関係数(P値)が0.38であり、後期の9回のフリップ学習でも相関係数は0.289と低い相関が示された。これらの結果から、事前の視聴回数から学生の学習成果の良し悪しを判断することはできないことが示唆される。筆者は「授業後に事前動画を再び見ることはありますか?」について調査した結果、前期では学生の66%、後期では83%もの学生が授業後に録画を復習として活用していることがわかった。これは、

なぜ後期の学生の課前予習動画の視聴回数と学習成果の関連性が、 前期よりも低いかを説明できる。したがって、反転授業実施では、 事前予習に加えて、後で生徒が録画された映像をどのように活用す るかも、重要視すべき要素となる。

#### 5. おわりに

今度の教育実践は、初級日本語文法の授業に反転授業と学思達との組み合わせにより、その学習効果を高めようとするが、実践の結果、事前学習の確認問題を小テストにすることは学生の事前学習率を向上させることができる。そして、授業中で設計された様々な教育活動は、学思達、また、発表をポイント化にするという策を組み合わせることで、学生の発言意欲を高め、グループ間のコミュニケーション能力を強化できることが確かめられた。だが、後期の授業になると、学生は徐々に学習倦怠の現象が現れてきて、また、ビデオを見ているときの学習者の質問解決など、まだ、反転授業を実施しているときのさまざまな問題が残っているのである。

# 参考文献

日本語

- 小松泰信(2014)「導入教育におけるタブレット端末を活用した全学 反転授業:事前ビデオ視聴とリアルタイム評価による効果」 『ICT 活用教育方法研究』17(1)、東京、私立大学情報教育協会、 pp.43-48
- 中溝朋子(2017)「留学生対象日本語クラスにおける反転授業の実践 -中上級文法クラスにおける試み」『大学教育』14,山口、山口 大学大学教育機構、pp.55-62
- 藤田哲也・芳賀瑛(2017)「心理学測定法の反転授業に対して学生は どう受け止めたかIビデオ教材を用いた場合とテキストのみを 用いた場合の比較」『日本心理学会大会発表論文集』、東京、日

- 本心理学会第 81 回大会、pp.951-960
- 古川智樹・手塚まゆ子 (2015)「日本語教育における反転授業の実践 一文法教育における試みと課題」『第 17 回〔2014 年度〕日本 elearning 学会学術講演会論文集』、東京、産業技術大学院大学、 pp.25-33
- 古川智樹・手塚まゆ子(2016)「日本語教育における反転授業実践― 上級学習者対照の文法教育において―」『日本語教育』(164)、東京、日本語教育学会、pp.126-104
- 李美麗(2022)「学習者から見た一斉授業と反転授業の学習効果について」『台灣日語教育學報』(38)、台北、台湾日語教育学会、pp.143-170

# 英語

- Chickering, A. W. & Ehrmann, S. C. (1996). Implementing the Seven Principles: Technology as Lever. AAHE Bulletin, 49(1-10), 3-6.
- Flipped Learning Network. (2014, March 12). Definition of flipped learning. Retrived from http://flippedlearning.org/definition-of-flipped-learning/
- Frydenberg, M. (2012). The flipped classroom: It's got to be done right.

  Retrieved, from http://www.huffingtonpost.com/mark-denberg/the-flipped-classroom-its b 2300988.html
- Hamdan, N., McKnight, P., McKnight, K. & Arfstrom, K.M.(2013) A review of flipped learning[A]. Flipped Learning Network [C].Retrieved Nov.17, from Herreid, C. h., & Schiller, N. A. (2013).
  Case studies and the flipped classroom. Journal of College Science Teaching, 42(5), 62-66.
- Hunt, M. W. (2013). video and sound production: flip out! game on! Techniques: Connecting Education and Careers, 88(1), 36-38.
- Wallace, M. L., Walker, J. D., Braseby, A. M., & Sweet, M. S. (2014). "Now, what happens during class?" Using team-based learning to

- optimize the role of expertise within the flipped classroom. Journal on Excellence in College Teaching, 25, 253-273
- Westermann, E. B. (2014). A half-flipped classroom or an alternative approach? : Primary sources and blended learning. Educational Research Quarterly, 38(2), 43-57.

# 中国語

- 陳邵屏(2019)《不只是學思達-學思達融入創思技法於國小國語課程 之行動研究》臺北、國立臺灣師範大學碩士論文
- 黃啟原(2018)《學思達教學應用在技術型高中會計課程之實驗研究》 臺北、國立臺灣師範大學碩士論文